

多摩美・山形 季央 氏 に聞く

2018 - 01 - 31 取材：MARUYAMA

多摩美術大学
グラフィックデザイン学科 教授

山形 季央 先生



資生堂の宣伝制作室長として、広告や展覧会のアートディレクションを担当され、現在は多摩美術大学でグラフィックデザインを教えています。

NTSの書籍「生物の科学 遺伝」と「未来材料」のロゴの生みの親であり、ブックデザインや企業のロゴマークなどを通じて、デザインと企業の上質な関係を築いています。

Part 1 「生物の科学 遺伝」と「未来材料」のロゴ制作にあたって

——ロゴを制作する時に、普段から心掛けていることは何でしょうか？

まず、ロゴというものは文章と違って読むものではなくて、瞬間的に目に飛び込んでくるものです。それを意識したうえで、その文字の意味の背後にある企画者の想いと文字の形を組み合わせさせていきます。企画者の想いがあればあるほど、それを文字に反映するべきで、優秀なインタビュアーのように、デザイナーは依頼者が抱える想いや夢を聞くことが大切です。ロゴをデザインする時は、文字と文字の関係性を見ることから始まります。「未来材料」や「生物の科学 遺伝」という言葉ひとつひとつには意味があって、こう並べて欲しいという想いは文字の側にあるんです。それを発見するように文字をじっと見つめて、文字と文字の間隔について研究していきます。

——「未来材料」のロゴには、どのような制作意図がありますか？

「未来材料」については、「マテリアル（材料）の中に未来はある」というコンセプトを形にしたいと思いました。表紙のメインビジュアル自体が未来を提示していますが、そのビジュアルが毎回変わるため、どんな素材が入っても良いようなロゴを目指しました。また、スピード感＝未来感ということで、時間が前に進んでいる感じを表現したいと思いました。そのため、平体をかけて文字間を開けています。書体にあまり意味を持たせすぎないように、ロゴそのものはシンプルにしました。

——「生物の科学 遺伝」のロゴについても教えていただけますか？

遺伝は「生物の科学 遺伝」のロゴとして依頼を受けました。遺伝の「伝（しんにょう）」と「伝」という文字をじっと見ていると、太古から紡がれる遺伝子が暗号として繋いでいる流れを感じました。その絶え間ない流れの中に、私たちの心身も紡がれる。遺伝の中にある、まだ人間が解明できていない神秘。生物の情報が流れに乗っている様を文字化しました。文字を一つのかたまりとして見てもらいたかったので、文字同士を離さないで近づけているのが特徴です。



Part 2 本について考えること

——書籍の電子化が進んでいる中で、山形先生が本について思うことはどんなことでしょうか？

紙の本は無くならないと思います。電子書籍と本の一番の違いは、本は光の反射を見ているけれど、電子書籍は光そのものを見ていることです。電気の照明をずっと見るのは辛いでしょう。また、電子媒体はインターフェースを人間が選べないので、読む態度を決められてしまっています。本はパラパラめくれるし、新聞は広げられるけれど、電子書籍は一望性がありません。

——電子媒体の利点を挙げていただけますか？

電子化の最大の利点は、携帯性があることです。紙の媒体は自由度があるけれど、重さというのは本の課題でもあります。文化というのは必ず軽くなるように進んでいくので、未来に向かってモノがどんどん軽くなっていくのは当たり前のことなんです。仕事や旅行に出ると荷物が増えますね。モノに携帯性が求められた時に、電子媒体は必要なんです。

——それを踏まえて、本を作る側が意識して取り組むべきことは何でしょうか？

モノがそこにあるということは、私たちが存在しているように、そこに存在しているということです。電子媒体はモノでは無いように感じられるけれど、本は紙のかたまりとして存在を感じます。そんな本としての魅力を残しつつ、重さや保管場所、つまり運搬や流通の課題を解決できるように、本のカタチは変わってもいいと思います。情報そのものが溢れ返る中、情報の良し悪しをきちんと判断し、そこから何かを汲み取りたいと思っている人が増えています。本当に良い本は、そのカタチを変えても残っていくはずですよ。つまり、人間が求める変化を形にすることだと思います。

Part 3 美術大学での教育について

——デザインを教える時に、大切にしていることは何でしょうか？

学生はひとりひとり違うということです。優劣でなく個々人の違いがあるので、何人のクラスであっても、一对一の関係に還元されると思っています。知識は本人が吸収しようと思っている時にしか伝わらないので、そもそもデザインを教えるというのは、本当の意味ではとても困難なことです。なので、学生ひとりひとりに寄り添うように、一緒にデザインを作っているという感覚です。

——今までに色々な学校で教えていらっしゃいますが、時代とともに学生は変化していますか？

学生は昔も今もそう変わらないです。教えている教員やカリキュラムが違うだけで、学生の素晴らしさというものは、いつの時代も変わらない。誰も姿形は変わらないです。目や耳はふたつで、後ろが見えない……それゆえに悩んでいることは一緒なんです。しかしながら、学生を取り巻く環境は変わってきています。インターネットの台頭によって、特に大きくメディア業界が変わりました。分野の境目が曖昧になる中で、デザインを使い、社会をどう変えていけるかということが大きな課題となりつつあります。その中で、歴史観と世界観の両方を持って、社会の中で自分の位置付けができるように授業をしています。

——最後に、先生の最近のお仕事をご紹介しますか？

「日本のグラフィック 100 年」という本を執筆しました。2018 年の 1 月に発売になります。広告とエディトリアルデザインに長く携わってきて、もう一度改めて「グラフィックデザインとは何か？」自分が経験した世界を掘り起こしたいと思いました。この書籍では、日本のグラフィックデザインの名作と呼ばれる、170 名を超える作家による 600 の図版を紐解きながらまとめています。日本のデザインの黎明期といえる明治・大正時代から現代まで 100 年の間に起こった、グラフィックにおける様々なエポックとその作品を紹介しているので、手にとってもらえたら嬉しいです。



2018年1月発刊

編集・著：山形 季央
ISBN：978-4-7562-4885-5 C3070
Format：B5判
Size：257×182mm
Pages：400 Pages (Full Color)
Binding：ソフトカバー
発売元：パイ インターナショナル
定価 (本体3,900円+税)

NTS代表の吉田が資生堂の知人を介して山形氏と知り合ったのは1995年のことです。『現代おさかな事典』のブックデザインをお願いしました。シルクスクリーンを初めて商業印刷に採用するなど斬新な装丁が評判を呼びました。以来、書籍デザインの範囲にとどまらず交流が続いており、この貴重なご縁に感謝しています。

